

法句経①

平成30年5月第2週放送

ほっくきょう
法句経は、パーリ語で遺されている原始仏典の一つとして、現代において、洋の東西を問わず世界中で親しまれています。423の短い教えの言葉からなるこの仏典が
へんさん
編纂されたのは、お釈迦様がお亡くなりになり、しばらく後とされています。

それでもなお、この経典は、仏教に遺る最古の経典の一つとして、当時のお釈迦様の教えが^{しの}偲ばれることから、古くより修行者を中心に仏教徒の道しるべとされています。

法句経において、心について語られる章では、「心は…形なく、胸の奥の洞窟に潜んでいる」として、その様子を「動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い」と観察されています。その心に対し「英知ある人はこれを弓の矢を、真っ直ぐにととのえるようにする」としています。

捉え難い私たちの「心^あの在り方」を捉え、その心を絶えず気を付けておさめることで、安らぎがもたらされることを示しています。

自分の心を守るという視点は、私たちにとって、大いに助けになる考え方です。私たちが無いものを求めたり、あるものをもっと欲しいと求めるとき、私たちの心は動揺し、ざわめいています。

また、言い争いになれば、売り言葉に買い言葉で、ついつい余計な一言を言ってしまい、後になって後悔するような場面は、日常によくあることです。

そんな時に、お釈迦様の言葉は、怒りの真ただ中にある自分から、一步退くことを勧めます。「自分の心が今ざわめき、護られていない」と考えることができたなら弓の矢が本来の働きをするように、真っ直ぐにととのえ、そのざわめきから心を守る行動へと移ることができるということを、私たちに教えてくれています。

また、お釈迦様は、心を守り、心を制する私たちの意思の働きが、絶え間ない努力

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

を要する、大変な行いであることも、よく理解されています。大変であるからこそ、一緒に教えを護り、心をととのえるようにと励ましてくださっているようです。

— 終 —